

飛鳥資料館特別展

◆春期特別展「それからの飛鳥」4月14日～5月31日

元明天皇の和銅3年、都は藤原から平城に移される。政治の中心は日本国家成立の故地を離れ、二度と飛鳥に戻ることはなかった。しかし「ふるきみやこ」飛鳥が、まったく忘れ去られたわけではない。時代の節目ごとに、人々の記憶のなかによみがえり、この国の過去を振り返り未来を考える拠り所とされてきた。飛鳥資料館の今回の特別展示では、奈良時代以降の飛鳥地域がどのような変遷を経て現代に至っているのか、各時代の歴史資料や遺跡発掘の成果をもとにとらえなおすを試みた。

遷都直後、藤原宮は和銅4年には火災にあって焼け落ちるが、藤原宮で使われた瓦や宮柱の多くは、平城宮の造営のために奈良に運ばれており、平城宮の発掘調査で出土した資料から、飛鳥時代最後の宮殿の様子をしのぶことができる。前代の宮殿、小墾田宮についても雷丘南側の明日香川東岸から「小治田宮」と記された平安時代の土器がみつかった奈良時代淳仁朝の小治田宮がこの地において機能していたことが確かめられ、鳥宮も10世紀まで続いていたことがわかる。

奈良時代、高市郡には大和の国府が置かれる、平安時代にはいっても飛鳥には中央貴族の位田や省庁の官田が点在し、この地域が中央貴族とのつながりを失っていないことを示している。そしてまた飛鳥周辺は遷都後早くから、興福寺あるいは東大寺の荘園が設けられ、中世には興福寺の支配力が大きくなっていく。

飛鳥の地は中世にはいっても吉野や高野山への重要な参詣路だった。11世紀の初頭に金峰山に詣でた藤原道長は飛鳥寺、橘寺、また山田寺などに立ち寄りかての都の大寺のその後の姿を書きとどめているが、貴族の後ろ盾を失った飛鳥の諸寺は、次第に衰退していく。

戦乱の時代にはこの地を訪れる旅人も、まれとなるが、江戸時代にはいって世の中が落ちつきを取り戻すと、岡寺や桜の名所吉野山は多くの行楽客を集めるようになる。また尊皇復古の思想のたかまりとともに、御陵研究家による古墳の実地踏査などもさかんに行われるようになる。江戸時代の篤志家、知識人の動きが現在の飛鳥の遺跡研究、保存の礎となったともいえよう。

◆秋期特別展「UTAMAKURA」



UTAMAKURA
映像 ■ 翻訳 ■ 万葉集



今回の特別展は、日本文学にかかわる芸術家の活動を公開するもので、飛鳥資料館の展示としては異例の試みとなった。

英国の詩人と写真家とが共同してすすめるこの活動は、和歌によみつがれてきたうたまくらの地をたずね、新たな写真影像と和歌の英訳とによって、日本の伝統文化と、それを育んだ風土の現在の姿とを捉え直そうというもので、英国文化協会、英国大使館がすすめている英国祭'98に、公式に参加する企画ともなっている。

計画そのものは、古代から近世にいたる広範な日本文学の伝統を通観することを目指すものだが、資料館での展示は、計画の一部分、特に万葉の故地としての飛鳥に主眼をおく。展示される作品は、1998年の春以来、飛鳥資料館の助言、飛鳥保存財団の後援のもとに、飛鳥地域ですすめられた創作・研究活動の成果を中心とした。

このような芸術・研究活動を通じて、この国の文化・歴史を、諸外国の人々に伝えることも、これからの博物館のはたすべき役割といえるだろう。

そして、一方ではまたこの特別展示が、われわれにとっても古い文化と、国土の現状とをみつめなおす好機となるであろうと考えている。

(岩本圭輔)